

2022 年度  
 学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

放射線技術科学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:放射線技術科学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p style="text-align: center;">□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            臨床実習前能力試験を行った            学内実習ではルーブリックを採用</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。</p> <p>「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p style="text-align: center;">■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            小テスト、中間試験、ノート提出、イーラーニング、ラーニングボックス、課題提出などを使用して行った</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。</p> <p>全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p style="text-align: center;">□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p>

	<p>シラバスに適切な評価方法が記載されている 3, 4年生には国試模擬試験を行えたが、1, 2年生には行えなかった</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 GPA は個人指導に用いた 学内実習では確認試験を行った</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 ガイダンスや個人面談で指導したができない学生がいた</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 1年生の学科専門科目から過去問を解かせ国家試験の意識付けを行った</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 学生の意識調査を行った</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 FD の授業評価を参考に改善を行った</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) 上記達成状況の具体的内容 コロナ禍で病院訪問ができなかった</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程</p>

	<p>の改善を図ります。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p>上記達成状況の具体的内容</p> <p>IRと連携を行っている</p>
--	--

2022 年度  
 学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療栄養学科・管理栄養学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療栄養学科長、管理栄養学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>          学修ポートフォリオの活用については、やや遅れているが、その他はほぼ達成している状況</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>          小テストについては各授業ではなく2から3回毎に行われている場合もあるが、その他については達成している。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p>

	<p>アウトカムの確認を行いつつある。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 3年次後期ガイダンス時にアチーブメントテストを導入し、合格することが学外実習の履修要件としている。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> PDCA 活動を促しているものの活動している学生が少ないのが現状である。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 入学者数あたりの合格率は 77.3%であった。前年度よりアチーブメントテストを履修要件に入れ、改善を図っている。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価は、一部科目について行われている。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 各教員の各授業について授業評価を行い、改善を促している。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 4～5月の卒業生による講演時に評価をいただいている。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程</p>

	<p>の改善を図ります。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p>上記達成状況の具体的内容</p> <p>国家試験不合格者の分析など IR 分析により改善を図っている。</p>
--	---

2022 年度  
 学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療栄養学科・臨床検査学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療栄養学科長・臨床検査学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ループリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            臨地実習、学内実習における客観的臨床機能試験及びPPによる実習時まとめの発表は達成している。            臨地実習、学内実習におけるレポート作成はほぼ達成している。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            座学における繰り返し学習、復習のための小テストを実施してほぼ達成している。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したかを把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p>

	<p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 座学における復習のチェック機構の充実、確認を強化する。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨 学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合が あります。3 年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入 する。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> GPA2.0 以下、急激に GPA 下降した学生の面談を実施しておりほぼ 達成している。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学 修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を 促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> アンケート調査、面談を実施して具体的に聞き取りを教員が判断してお り、ほぼ達成している。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学 修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」 に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の 割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入 学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および 大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 国家試験対策担当教員が各ゼミに出向き、進行具合をチェックしてお りほぼ達成している。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ル ーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意 識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> アンケートを実施して内容に準じた教育方針を会議で議論することを 実践しておりほぼ達成している。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生 の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続し ていきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 自己評価を参照して議論して学生にフィードバックする実践をしてお りほぼ達成している。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、 教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p>

	<p>卒業生に臨床検査技師の職業体験授業をしてもらい、学生がどのようなタイプの就職があるかを考えさせる講義を实践しておりほぼ達成している。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>全体として実施している内容は多い。しかし、成果が出ていると言えないところもある。今後は、成果が出たかどうかをより細かく各学年の動向を見ながら検討していく。</p>
--	---

2022 年度  
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

リハビリテーション学科・理学療法学専攻／理学療学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:リハビリテーション学科長・理学療法学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>            臨床実習科目ではルーブリック、OSCEを導入、厚労省新指定規則に準拠して、成績評価を実施した。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。</p> <p>「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>            「形成的評価」「総括的評価」共に実施。国家試験への対応も強化した。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。</p> <p>全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b></p>

	<p>計 5 回の臨床実習を節目に、専門科目の講義、実習、試験を配置し、臨床の中での位置づけ、国家試験との関連を科目毎に解説した。さらに学年末の基礎 3 科目模試を実施、到達度を確認、成績不良者への学習指導を行った。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3 年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> GPA を進級、卒業、国家試験合格の目安とし、学生、保護者面談の資料に活用した。また、臨床実習施設間にも難易度の差があるため、学生配置の参考資料として活用した。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 特に臨床実習科目において、「行動記録」「学習記録」「行動計画」を毎日の記録としてPDCA活動を行わせている。実習支援システムを使用し、教員が適宜、指導、助言を与えている</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 過去 5 年間の国家試験合格率は、91～100%で、常に全国平均を上回っている。入学時の偏差値と比較し、国家試験合格率の順位は東海地区内で約 9 校と逆転、成果を上げている。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 実技試験を伴う科目ではルーブリックを用いた成績評価を導入している。臨床実習科目では、加えて OSCE によるルーブリック評価を実習開始前に実施している。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 学生のも最終目標は卒業、国家資格取得なので、国家試験解答内容を</p>

	<p>分析し、各教員はこの結果を受け、授業内容の改善を図っている。同時に授業評価による学生からのフィードバックも参考にしている。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。  <input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>  学科開設 20 年を超え、本学科の臨床実習指導者の多くが、本学卒業生となってきた。臨床実習毎の面談、メールや電話によるコミュニケーションは密に取れている。また 2021 年度より実習支援システムを利用し、毎日、実習の進捗の確認、指導を行っている。さらに学科会議で学生の学習状況や問題点を共有し、改善に役立てている。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。  <input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>  特に休退学者、留年者の特性を分析し、指導の参考に利用している。</p>
--	--

2022 年度

学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

リハビリテーション学科・作業療法学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:リハビリテーション学科長・作業療法学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            実習科目評価にはプレゼンテーション、実技などを導入して評価用紙を使用して行っています。また、臨床実習前にはOSCEを行い、実習前の準備をしています。実習後にはセミナー形式で評価用紙を用いて学生ごとにプレゼンテーションを行い、教員が点数で評価して成績をつけています。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。</p> <p>「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(semester)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            単位認定の評価には小テストを採用し、定期テストには問題の3割を国家試験の過去問を採用しています。その点数を総括的に評価として単位を認定しています。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。</p> <p>全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最</p>

	<p>最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>学年ごとに毎年担任、副担任による面談の機会を設けており、GPAの得点、履修状況について学生の相談や指導を行い、現在の学生の進級要件の達成度などを理解させている。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えてGPA注3による評価を活用します。</p> <p>GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>教育質検討委員会にてGPAの成績を確認し、GPAが低い点数の学生には担任を通して面談を行い指導しています。また、4年生においてはGPAの得点を就職活動に利用して、就職の相談を行っています。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA活動注4)を促します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>学生の主体的に学習する態度を生かして、学生自らの勉強会やゼミ活動を促しています。また、各学年にはリーダー、副リーダーを決めて様々な学校行事を取り組むように指導しています。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合やGPAの他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。</p> <p>本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input checked="" type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>1期生は学生のレベルの確認が十分できなかったため遅れがあった。しかし、2期生からは4年生の進級割合も改善し、1期生の国家試験の成績を振り返りながら指導の体制を作成している。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>ルーブリックの活用は各担任が学生ごとに行っており、全学的な学習調査も教育質検討委員会にて利用して、他学科・他専攻との比較検討を行っている。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD注5活動)を不断に継続していきます。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p>

	<p><b>上記達成状況の具体的内容</b>          教員はFD研修会に参加し、継続的に教育課程の改善に努めている。また、日本作業療法士協会が行っている教育に関する委員会には常時参加し、参考になっている。三重県下の養成校であるユマニテク大学校とは交流を図り、三重県の作業療法士の教育改善に努めている。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。  <input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>          今年度初めて卒業生が出たので、教員の臨床実習の訪問や学校が行う調査など利用して教育課程の改善に努めている。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。  <input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>          学内の様々なデータを活用して、教育質検討委員会および担任の学生面談において教育課程の改善に努めている。</p>
--	---

2022 年度

学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・医療福祉学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療福祉学科長・医療福祉学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>                      相談援助技術の習得、学外実習に向けたロールプレーその他の専門技術の習得のために各種の指導・援助をし、一方で演習・実習に対しても適切な評価方法を用いて評価ができています。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>                      各学生が一定の学力レベルに達するまで様々な手立てを講じて学力の伸長が実現できるまで支援をしてきた結果、社会福祉士国家試験の合格率も全国平均を大きく上回る80%を達成することができた。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したかを把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p>

	<p>□達成(100%)■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>  毎年4月の段階での担任教員と学生による個別面談において、GPAの確認をし、前年成績の振り返りと今年度への取り組み目標の設定、9月度にも面談において、前期成績の振り返りと後期への対応の意思確認をしている。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。  GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>  上述した通り、JPA の確認は絶えずできている。また、3・4年生には学内外の模擬試験を基にした学習達成度の判定を持ち込みながら指導援助を行っている。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>  3・4年生には学内外の模擬試験後の指導にあっては、PDCA サイクルを回すことが可能となっている。1・2生についても同様の対応ができるべく進めていく。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。  本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p>□達成(100%)■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>  入学者が定員を超えることがここ数年見られない現状にあって、各教員による少人数教育ができており、細かな点まで目が届くため早めの相談ができ、休退学者が少なく所定年限内での卒業・国家資格取得が可能となっている。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>  各教員間でばらつきはあるものの、多くの教員が毎時間終了時にリアクションペーパーの提出をもらい、次回の講義や演習に生かす取り組みを展開している。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。</p> <p>□達成(100%)■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p>

	<p>上述の通り、毎時間ごとに学生の評価を受け、講義や演習に対する要望や意見を聴取できている。また、講義後のオフィースアワーにも積極的に取り組んでいる。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。  <input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>          社会福祉士として病院に勤務、社協や児童相談所に勤務する OB などに積極的に話していただく機会を設けており、現場での制度の運用や困難事例の紹介などについても紹介してもらっている。特にダイバーシティへの取り組みについて、各種の福祉現場の状況報告は大変有意義なものとなっている。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。  <input type="checkbox"/>達成(100%)<input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>          科学的な根拠の1つであるGPAでの評価や年6回から8回実施される国家試験模擬試験の結果を活用しての教育の底上げ、各学生の能力伸長への不断の取り組みの継続が今後効果を表すものと期待している。</p>
--	--

2022 年度  
 学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療福祉学科・臨床心理学専攻	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医療福祉学科長、臨床心理学専攻長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            ルーブリックは科目によって導入しており、講義科目では知識・思考を確認するためレポート、小テスト、発表を組み合わせています。また技能や態度についても、ディスカッションや発表に即して総合的な評価を行っています。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            小テストやリフレクションシートを通して、期待される水準に到達できているかを確認し、最終試験で総括的に評価を行っています。また、学習意欲の乏しい学生には講義担当教員や学年担当教員あるいはゼミ担当教員が個別に指導を行っています。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最</p>

	<p>最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>1年生でチーム医療、基礎心理学を修め、2年生では臨床心理学の基礎を学修させます。そして3・4年生では実践的な心理学を学修するカリキュラムとしています。1・2年生で人の心の仕組みについて一般的な法則に関する知識や検討する姿勢を身につけます。その上で、実践的な心理学については、2年生の心理実習Ⅰで実習施設指導者からの講義を受け、心理専門職としての態度を身につけます。3年生の心理実習Ⅱではコミュニケーションスキルを高める体験が含まれます。4年生の心理実習Ⅲでは、実際に現場に出て、高い倫理意識や臨床的態度を常に心がけて実習に赴きます。このように、知識や実践能力に関わる自分の立ち位置を把握することができるようにカリキュラムを設定しています。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。</p> <p>GPAは学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>臨床心理学専攻の場合は、修士課程に進学して国家資格である公認心理師の受験資格が得られます。学修レベルに到達しているかという指標として、大学院進学推薦基準として GPA を活用していますし、進学指導の一助としています。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>小テストの結果のフィードバックや、レポート・卒業論文の指導、心理実習の事前・事後指導を通して、学生に学修行動を振り返るよう促しています。特に卒業論文では、研究計画を立て(P)、実際に調査・分析・執筆を行います(D)。この研究を通して論理的な思考や研究スタイルにどのような問題が存在していたのかを本人自身の批判的思考や指導教員の指摘を通して得て(C)、今後の進路・人生の糧とする(A)という、大きな循環を意識した指導をしています。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。</p> <p>本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>臨床心理学専攻では修士課程修了後に国家試験・資格試験を受験することになりますので、国家試験対策に成績を活用することはありませんが、大学院進学希望者には3年次のゼミ指導において GPA を考慮に入れた個別指導を行っています。</p>

	<p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。  <b>■達成(100%)</b> <input type="checkbox"/> <b>ほぼ達成(実行中・80%)</b> <input type="checkbox"/> <b>遅れ有(50%)</b> <input type="checkbox"/> <b>大幅な遅れ有(30%未満)</b>  <b>上記達成状況の具体的内容</b>  卒業時に実施する学修行動調査、大学生活における学生意識調査の結果を参考にしています。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。  <b>■達成(100%)</b> <input type="checkbox"/> <b>ほぼ達成(実行中・80%)</b> <input type="checkbox"/> <b>遅れ有(50%)</b> <input type="checkbox"/> <b>大幅な遅れ有(30%未満)</b>  <b>上記達成状況の具体的内容</b>  学生の授業評価を取り入れ次年度に改善するよう、各教員が厳しく取り組んでいます。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。  <input type="checkbox"/> <b>達成(100%)</b> <input checked="" type="checkbox"/> <b>ほぼ達成(実行中・80%)</b> <input type="checkbox"/> <b>遅れ有(50%)</b> <input type="checkbox"/> <b>大幅な遅れ有(30%未満)</b>  <b>上記達成状況の具体的内容</b>  臨床心理学専攻卒業生は一般企業にも就職しておりますが、その就職先機関との連携は不足していることは否めません。しかしながら、公務員や教員、医療機関の職員となった卒業生・修了生から就職情報などを得られるネットワークは広がってきており、同時に就職先との関係構築がなされつつあります。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。  <b>■達成(100%)</b> <input type="checkbox"/> <b>ほぼ達成(実行中・80%)</b> <input type="checkbox"/> <b>遅れ有(50%)</b> <input type="checkbox"/> <b>大幅な遅れ有(30%未満)</b>  <b>上記達成状況の具体的内容</b>  IR 推進委員会で示された情報を教員間で共有し、教員各自が担当講義において反映させています。</p>
--	--

2022 年度  
 学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

鍼灸サイエンス学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:鍼灸サイエンス学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            知識や思考力の評価方法は試験、技能や態度についてはプレゼンテーション・実技・実習などを観察し、適切な評価尺度を用いる評価方法を活用しています。評価尺度については、事前に説明し、その学習方法について個別に面談しています。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            形成的評価については、国家試験および最終的総括評価(合否の判定)の2つを重点的に強化しています。国家試験は、学生の習熟度に合わせた実力テスト・模擬テストを底上げを目的として提供しています。総合評価は、必要な水準に達成できるまで、繰り返し実施しています。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階におい</p>

	<p>て、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>実技・実習科目では、達成度に応じた段階的な教育と評価を行っています。達成状況に遅れのある学生には、個の習熟度に応じた評価を実施しています。講義科目は講義中の段階的評価は行っていませんが、面談によって目標達成への学生の立ち位置を把握しています。全科目において、定期試験後、成績不良者に対して再度、段階的かつ反復した学習と評価(トコトン教育)を行いながら、目標達成に向けて関わりを持つ指導を徹底しています。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。</p> <p>GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>個別および三者面談時の指導において、進級・卒業・国家試験合格の目安として活用しています。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>成績不良の程度によって個別面談を増やし、学生の日常の取り組み状態を把握しながら、自己改善に結びつける活動を促しています。また教育支援者へも報告して、改善に結びつけるための協力をお願いしています。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。</p> <p>本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>2022 年度国家試験 入学者数のストレート合格率は、はり師 70.6%、きゅう師ストレート合格率 76.5%であった。この期は入学者 34 名中、退学者 4 名、留年者(休学者を含む) 4 名であった。2021 年度のストレート合格率 61.9%に比べて向上した。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>教育効果を高めるために、学科評価と全学的調査を含めて、評価指導しています。</p>

	<p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>学生の授業評価に基づき、担当教員の教育改善を継続しています。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>客観的評価はないが、口答による主観的評価や意見を聴取して、教育課程の向上に生かしています。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>IRでの分析結果に基づき、国家試験対策や教育課程の改善に取り組んでいます。</p>
--	---

2022 年度

学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

救急救命学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:鍼灸サイエンス学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。  <input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>                      試験やレポートを行っている</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。                      「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。  <input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>                      小テストを授業終了時に施行</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。                      全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。  <input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>                      小テストや振り返りを記載している</p>

	<p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものです が、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨 学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合が あります。3 年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入 する。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 3年までの学年進行無しのため評価不可</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学 修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を 促します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%)□遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> ポータルサイトへの入力等、PDCA活動を促している。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学 修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」 に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の 割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入 学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および 大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 国家試験受験学年に達していないため評価不可</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ル ーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意 識調査により評価します。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 実習・演習においては、振り返りの記載をしている</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生 の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続し ていきます。 ■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 授業評価を行い、授業の改善に努めている</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、 教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%)□大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 卒業生がいないため評価不可</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として 集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程 の改善を図ります。 □達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満) <b>上記達成状況の具体的内容</b> 初年度のためデータがないため評価不可</p>

2022 年度  
 学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

臨床工学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:臨床工学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input checked="" type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            知識と思考力の評価は、定期試験とレポートで行っており、技能や態度の評価は、「生体機能代行装置学実習」で、口頭試問および実技試験の評価にルーブリックを用いている。学生自らが行う学修ポートフォリオの活用はできていない。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            講義中に小テストを実施し、講義中の重要なポイントと定期試験までに到達しなければならない水準を把握できるようにしている。また、4年次には、国家試験の模擬試験を毎月1回以上行い、試験ごとの採点結果を学生に配布して苦手分野の把握、国家試験合格までの到達度を把握できるようにしている。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階におい</p>

	<p>て、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>シラバスに講義の各回における到達目標が記載されており、授業終了時、または、科目終了時に「何ができるようになったか」が確認できるようになっている。</p> <p>④各科目の可否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。</p> <p>GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p>□達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) ■遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>2年次後期の学修指導、4年次に国家試験対策でのクラス分けに GPA を活用している。また、各学年の前期と後期に定期面談を実施しており、単位の修得状況と GPA を併せた学修指導を行っている。</p> <p>3年前期学内実習中での確認試験の導入はできていない。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>前期と後期に実施している面談時に、各学年担当が成績(GPA)をもとに学修指導を行い、これまでの学修行動の振り返りを促している。</p> <p>振り返りから得られた知見から、今後の学修計画を立ててもらい、必要に応じて、基礎力向上のために開講されている選択科目の履修を勧めることで、学修行動の改善を行っている。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。</p> <p>本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。</p> <p>全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>「入学者数あたりの合格者数」は学科内で共有され、この数字をもとに、次年度の学習指導方法の改善を行っている。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>学修行動調査や意識調査の結果は学科内で共有され、技能や態度の教育効果の評価に活用されている。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。</p>

	<p> <input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>          学生の授業評価を各教員が確認し、授業評価の結果をもとにシラバスに改善案を記載するなど、教育方法の改善を継続して行っている。       </p> <p>         ④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。  <input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>          8月に実施された「卒業生に対するアンケート調査」および「本学卒業生に関するアンケート」の結果を学科教員で共有し、教育課程の改善に活用している。       </p> <p>         ⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。  <input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)  <b>上記達成状況の具体的内容</b>          IR推進室から提供されるデータに加え、学科内でデータ集積を行い、このデータを活用した教育方法の改善は常に行っている。各学年のGPAを分析することで、学年ごと、さらには学生ごとに合わせた国家試験対策を行っている。       </p>
--	---

2022 年度

学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

医療健康データサイエンス学科／医用情報工学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:医用情報工学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>                      成績評価方法は授業科目ごとに、授業担当者が、効果的な評価方法を工夫し、期末試験だけでない評価方法を使用している。日常の学修への取組状況を把握するために、多数の授業得科目で学修ポートフォリオとして learningBOX を使用し、授業ごとの学習内容について小テスト(理解度確認テスト)を実施し、成績評価に使用した。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、合否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(合否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>                      「形成的評価」と「総括的評価」を組み合わせるために、多数の授業科目で、learningBOX を使用し、繰り返し、小テストが受験できるように設定し、学生には合格点に達成するまで、繰り返し、学習し、小テストに回答するように指導している。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで</p>

	<p>着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> シラバスに最終的な目標を明記し、授業ごとに獲得できる能力を明記し、学生が自分の立ち位置を把握できるように工夫している。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> GPA の低い学生に対しては、クラス担任が個別に面談を実施している。また卒業研究のための研究室配属では GPA を加味して、研究室を決定している。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 毎年、前期と後期のガイダンスにおいて、「将来設計と生活時間 PDCA シート」を提出させ、自己改善を促す仕組みを構築し、実施している。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。 全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 卒業時における資格試験の取得者数は、「IT パスポート(国家試験)」15人、「基本情報」2人、「医療秘書技能検定試験3級」17人、「医療秘書技能検定試験2級」7人、「医療情報基礎知識試験」6人、「医療情報技師」1人、合計48人。入学者数32名当たりの取得者数は、1.5資格/人であり、比較する学科がないので不明である。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 技能や態度への教育効果を計測するために、全学的な学修行動調査や意識調査に協力している。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p>

	<p><b>上記達成状況の具体的内容</b> FD講演会に出席するだけでなく、FD講演会の講師を担当させていただいている。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 学生の就職先へのアンケート結果により、コミュニケーション能力の向上を要望している就職先が多いので、グループワークを含んだPBL授業を増加させている。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。 □達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> IR推進室のメンバーとなり、IR活動に協力している。</p>
--	---

2022 年度  
学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

薬学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:薬学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            引き続き、試験やレポートなどでの総合的な評価が実施されており、各実習では、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリックなど)を用いる評価方法が用いられている。また、実務実習に対して事前実習での学習内容や評価などを確認できる学修ポートフォリオを作成し、実習施設先に持参させている。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。</p> <p>「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            大学として推奨・実施している特別教育を薬学部も導入し、定期試験に向かって授業を理解できるような学習プログラムを実施している。定期試験終了後も、各教科担当が単位未修得者に対して教育を実施することで授業内容の理解を深め、単位修得化を目指している。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。</p> <p>全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階におい</p>

	<p>て、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 各教科のシラバスにも示されているとおり、学生が目線での知識、技能、態度の修得を目標においており、そのための授業プログラムが組まれている。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。 GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したのですが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> GPAについて、学生、保護者に理解していただいております。また、大学としても取り組みの中でIR室推進室の協力の下でGPAなどを利用した学習成果予想も立てられて、国家試験やCBTへの学生学修の支援が行われています。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 国家試験・CBTに関する学内試験や模試の結果などについて、学生が自己の振り返りを行った上で、担任との面談を行っている。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。 本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 国家試験の結果について、全学の国家試験対策委員会にて報告している。その際にはストレート合格率を重視し、その数値の向上のために、対策の反省点、その後の改善のための対策を報告している。</p> <p>②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b> 技能や態度の教育効果については、ルーブリック評価を積極的に用い、また、これらの評価についての効果向上のために、教員は研修会や講習会に積極的に参加して、評価の標準化を目指している。また、学生からの授業評価などについても評価手法の改善のための基礎情報として積極的に活用している。</p> <p>③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生</p>

	<p>の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>全学FD委員会などの研修会には多くの教員が参加している。また、薬学部のFD委員会も積極的にコアカリキュラムなど教育に関する研修会を定期的に開催しており、多くの教員が参加して研鑽を積んでいる。</p> <p>④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>毎年、卒業生へ教育評価アンケートを実施し、その要旨を学科内の教員で共有し、今日課程の改善に活かしている。</p> <p>⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>IR推進室から、学生の学修に有用な各種データを提供していただいております。また、薬学部からIR推進室の活動の支援のために教員が協力(データ提供、解析支援)している。</p>
--	--

2022 年度  
 学科・専攻の「アセスメント・ポリシー」自己点検・評価

看護学科	
3つのポリシーを前提とした「アセスメント・ポリシー」の達成状況を学科・専攻ごとに自己点検・評価する。	
責任者:教務・教育改革担当副学長 分担者:看護学科長 村田尚久(大学事務局長)、松永ひとみ(教務課長) 事務局:教務課	
2022 年度自己点検評価	
	活動計画内容
1. 学生単位の学修評価の方針	<p>①学位授与方針や授業形態に最も適した評価方法を採用します。知識や思考力の評価方法としては、従来から行われている知識・思考を確認する試験やレポートなどがあります。技能や態度については、プレゼンテーション、実技、実習などを観察し、適切な評価尺度(ルーブリック注1など)を用いる評価方法を活用します。薬学部では、客観的臨床能力試験(OSCE 注2)で技能や態度の評価が行われます。また、個々の学生の学修への取り組み方を評価するために、学生自らが学修過程ならびに各種の学修成果を記入する学修ポートフォリオを活用します。</p> <p><input type="checkbox"/>達成(100%) <input checked="" type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            試験やレポートに加え、グループワークでの学びをプレゼンテーションおよびディスカッションを通して自身の思考を論理的にまとめる力を評価している。技能や態度については、学内演習・臨地実習での達成状況を観察し評価するとともに、統合実習後の看護の統合 I (技術の統合演習)では、適切な評価尺度(ルーブリック 注1など)を用いる評価方法を活用している。</p> <p>②学修評価には、学生の学力向上の手段として活用する「形成的評価」と、可否(単位認定)を決定する「総括的評価」があり、両者を適切に組み合わせます。</p> <p>「形成的評価」には、各授業で行われる小テストや国家試験・資格試験のための模擬試験などがあります。「総括的評価」は学期(セメスター)修了時に行われる定期試験です。定期試験における最終的総括評価(可否の判定)に至るまでに、学生が期待される水準に到達するよう、形成的評価を必要に応じて繰り返します。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>達成(100%) <input type="checkbox"/>ほぼ達成(実行中・80%) <input type="checkbox"/>遅れ有(50%) <input type="checkbox"/>大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b>            ほぼ全科目で小テストや課題レポートによる形成評価を行っている。learningBox の活用も増加し、毎回の授業ごとに小テストを実施している科目もある。            国家試験のための模擬テストは各学年の学修進度に合わせ実施している。特に最終学年の4年次は複数回実施している。</p> <p>③各段階において学生が「何ができるようになったか」(アウトカム)を確認し、最終的な目標達成のどの位置まで到達したか把握できるようにします。</p>

	<p>全学生が「核となる知識について社会が求める水準」まで段階を踏んで着実に到達できるよう、授業、科目、学年終了時などの各段階において、学生が「何ができるようになったか」を適切な評価方法で確認し、最終的な目標達成に至る自分の立ち位置(マイルストーン)を把握できるようにします。</p> <p>□達成(100%) ■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>各科目で実施している小テストや事後課題による形成評価の結果は、適時学生にフィードバックし、科目の目標に到達するための支援に活用されている。learningBox の活用も増加し、毎回の授業ごとに小テストを実施している科目もあり、その都度、知識修得の到達度を学生自身が把握できるようにし、科目の目標に到達するための支援に活用している。定期試験後の解説、再試験後の特別教育においては、学生の傾向を把握しながら修得度に応じた指導を繰り返し行っている。</p> <p>④各科目の合否の判定(単位認定)に加えて GPA 注3による評価を活用します。</p> <p>GPA は学生が履修した全科目の成績の平均を数値で表したものが、進級、卒業(学位授与)、国家試験・資格試験合格の目安になり、奨学金等の審査、あるいは進路変更などの修学指導に用いられる場合があります。3 年前期学内実習において学内教員による確認試験を導入する。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>看護学科では、前期・後期セメスターのスタート時に定期的に担当教員が面談を行っている。特に年度末の GPA が 2.0 未満の学生には、生活リズムや学習方法の振り返りと今後の学習計画指導を行っている。加えて早期からの対応が必要な GPA2.0 未満の成績不振の場合、1 年次から保護者との 3 者面談を行い、状況の認識を共有するとともに、国家試験に向けた学習計画と家族の協力を得られるよう説明を行っている。4 年次からはゼミ担当教員が卒業研究指導とともに国試対策の模擬試験の結果も含め成績不振の学生に対して定期的に学習指導を行っている。</p> <p>⑤学生に主体的に学習に取り組む態度を育むために、学生が自らの学修行動を振り返り、自己の改善に結びつける活動(PDCA 活動 注4)を促します。</p> <p>■達成(100%) □ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>前期スタート時に SUMS-PO の学生カルテの学修目標に前年度の振り返りと新たな 1 年間の学修目標と具体的な行動計画を記載するように指導している。担当教員は前・後期セメスター開始時に、担当学生とその内容を踏まえながら面談し、PDCA 活動につながる支援を行っている。</p>
<p>2. 大学単位、専攻単位の学修評価の方針</p>	<p>①各専攻の教育課程が「核となる専門的知識について社会が求める水準」に学生が到達することに有効であったかどうかについて、単位認定者の割合や GPA の他に、国家試験・資格試験の成績を活用します。</p> <p>本学では、国家試験・資格試験の成績の指標として、各専攻における「入学者数(入学時資格取得希望者数)あたりの合格者数」を重視します。全国の同種・同レベルの大学と比較して上位となるように、各専攻および大学全体の教育課程編成や学修指導方法の改善に生かします。</p> <p>□達成(100%)■ほぼ達成(実行中・80%) □遅れ有(50%) □大幅な遅れ有(30%未満)</p> <p><b>上記達成状況の具体的内容</b></p> <p>模擬試験の成績については学生委員会を中心に分析し、担当教員と連携しながら学習支援に役立っている。2022 年度卒業生の看護師国家</p>

試験合格率 98.9% (85 名中 84 名合格) 昨年不合格の既卒者 1 名も合格であった。保健師国家試験合格率は 100% (18 名) であった。対入学者あたりの看護師国家試験合格率は 90% であった。

②技能や態度への教育効果については、各専攻・各科目の評価尺度(ルーブリックなど)を用いた評価結果の他に、全学的な学修行動調査や意識調査により評価します。

達成(100%) ほぼ達成(実行中・80%) 遅れ有(50%) 大幅な遅れ有(30%未満)

**上記達成状況の具体的内容**

全学的な学修行動調査や意識調査により、夜間のアルバイトやゲームやYouTub 等による夜型生活が学生の出席率や成績に影響していることから、1 年次の早期から学生の面談でこれらについて把握し、担当教員を中心に対応していている。

③各教育段階で、学生の授業評価や教員の自己評価の機会をもち、学生の立場に立った授業や教育課程の改善(FD 注5活動)を不断に継続していきます。

達成(100%) ほぼ達成(実行中・80%) 遅れ有(50%) 大幅な遅れ有(30%未満)

**上記達成状況の具体的内容**

学生の授業評価と教員の自己評価は毎年実施しており、学生の評価を授業に取り入れるとともに、教員の自己研鑽のための FD の定期開催を実施している。看護学科 FD では 2022 年度は「看護学実習教育における学生の思考力を伸ばす指導」というテーマで外部講師による講演会を実施し、実習施設の看護職にも Zoom で参加の機会を設けた。

④卒業生や学生の就職先機関による本学の教育に対する評価を活用し、教育課程の改善に生かします。

達成(100%) ほぼ達成(実行中・80%) 遅れ有(50%) 大幅な遅れ有(30%未満)

**上記達成状況の具体的内容**

毎年、実施されている卒業時の学生への教育評価アンケート結果は、学科内の教員で共有し、教育課程の改善に活かしている。

⑤以上の学修評価結果や教学についてのさまざまなデータを大学として集積して分析することにより(IR 注6)、科学的根拠に基づいた教育課程の改善を図ります。

達成(100%) ほぼ達成(実行中・80%) 遅れ有(50%) 大幅な遅れ有(30%未満)

**上記達成状況の具体的内容**

国家試験結果と 1 年次からの成績を IRと連携し分析しているが、十分な活用できていないので、活用方法について教務委員会、教育質保証委員会を中心に検討していく。